

基礎から学ぶ 楽しい疫学 第4版

中村好一(著)

北里大医学部教授・公衆衛生学

堤 明純

人間を対象とした学問だからこそ面白い

『基礎から学ぶ 楽しい疫学』の第4版が出版された。この業界(?)では有名な本で、どの版も8刷, 9刷を重ねている。PR通り、疫学の初学者にはとてもよい本だと思う。単著であることは、この本の特徴の1つで、章ごとに質、量ともに濃淡なく、必要最小限の(と著者が考える)情報が整理されている。

私は、2002年4月に著者の署名入りの初版を読んだから、本書のファンの一人で(第2版、第3版も購入)、現職では、学部学生に準教科書として紹介している。大学院生には必読書として、早期に3回読むように助言している。私の研究室で学んでいる大学院生は主に実務者で、修了後には、論文をきちんと読めて、現場で疫学を道具として使い(妥当な調査をし)、その結果を現場に応用できるようになってほしいと考えている。もちろん、著者も記しているように、別に勉強しなければわからないところもある。例えば、マッチド・ケースコントロールスタディのオッズ比の計算はサラッと流しているし、臨床疫学の章は初学者にはやや難しいかもしれない。本書を取り掛かりにして、研究を進めるに従い、学習を深めてもらいたいと願って指導している。

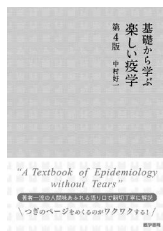
改訂を重ねているが、ほぼ同じ(ハンディな)厚さを維持している。今回、黄色の基調は変わらないがシックな装丁に変身し、扉の表題も縦書きになった。「著者に何か心境の変化があったのか?」「比較的若い読者層の受けはどうか?」などというらぬ心配をしてしまうけれども、通底している本書の哲学は変わらない。脚注が面白いというのも定評だ。「脚注だけでも面白い」というキャッチがあるが、もちろん、脚注だけ読んでも意味はわ

からないので、本文と一緒に堪能されることをお勧めする。実は、表の中にしれっと挿入されているコメントも面白い。人間を対象とした学問だからこそ、思い通りに測定できないことがあり、対象者の常識的な反応をよく考えて研究をデザインすることなど、気付きを与えてくれるところが多い。

版を重ねて約20年。初版から数えて変わらないことがいくつかある。その1つは、第1章冒頭の“point”の「まだまだ足りない疫学者と疫学の視点」である(だから、私みたいな者がやっているのかもしれない)。ここ数年疫学者は増えてきているように思える。しかし、今回、四読して(実際にはもう少し繰り返している)、やはりまだまだできていないと反省した。一方で、前3版と変わったのは、第13章の内容。ここだけ英語の副題がついていて、何やら、後進に託す言葉のようにも読める。

最後に、今回の改訂について注文を。評者は、疫学^{つまず}初学者の躓きの危険因子の1つは、用語のなじみのなさだと確信している。「デッドセクション」は、第3版の序を読まなければ、万人に意味が通じない。コラムの脚注が必要である。

——ということで、中村先生、もう少し楽しませてください。



●A5/頁242/2020年
定価：本体3,200円＋税
[ISBN978-4-260-04227-7]
医学書院 刊